

活動歴とレジャー経験

—小学生時代の野外活動経験の有無による比較—

吉原 さちえ（東海大学大学院生） 西野 仁（東海大学）

I. はじめに

文部科学省は、1999（平成 11）年 6 月の生涯学習審議会答申で「子どもたちの『生きる力』を育むには、生活体験・自然体験が必要不可欠である」とした。そこで、1999 年から関係省庁が連携し、体験活動の充実に向けた取組みが計画的に始まり、現在は全国各地で展開されている。日本では、体験活動経験に関連する研究に、野沢の「組織キャンプの自我概念の変化に及ぼす影響」（1975）、「一過性組織キャンプ継続性組織キャンプについての実践的研究」（1976）、川村らの「組織キャンプにおける自己概念の変化に関する研究」（1979）、飯田らの「母親のキャンプ経験とキャンプに対する態度との関連」（1983）などがある。しかし、これらの研究はキャンプ経験直後の影響に関するもので、「経験」による影響を長期的に捉えた研究ではない。国外では、Sofranko, A.J. and Nolan, M.F. の「Early life experiences and adult sports participation.」（1972）、Yoesting, D.R. and Burkhead, D.L. の「Significance of childhood recreation experience on adult leisure behavior: An exploratory analysis.」（1973）、Kelly, J.R. の「Socialization toward leisure: A developmental approach.」（1974）、Kelly, J.R. の「Outdoor recreation prediction: A comparative analysis.」（1978）、McClaskie, L.S. and Napier, L.T. and Christensen, E.J. の「Factors Influencing Outdoor Recreation Participation: A State Study.」（1986）、Iso-Ahola, S.E. and Jackson, E. and Dunn, E. の「Starting, Ceasing, and Replacing Leisure Activities Over the Life-Span」（1994）などがあり、「経験」による影響をライフスタイルという視点から研究をしている。

本研究の基本的なねらいは、「経験」が「後の経験」に及ぼす影響を明らかにすることにある。そこで、子どもの頃のキャンプ経験が成人の野外活動経験にどう影響するかを探る。

II. 研究の目的と方法

1. 研究の目的

本研究は、小学生時代に組織キャンプに参加したことのあるキャンプ経験者と参加したことのないキャンプ未経験者（以下、「経験者」・「未経験者」と略す）との間に、大人になってからの野外活動経験にどのような影響の違いが見られるのかを、具体的に「野外活動経験」、「野外活動・野外教育に関する意識」、などから明らかにすることである。

2. 研究の方法

1) 調査対象者：経験者は、小学生時代に組織キャンプに参加した経験がある 502 名を対象者とした。未経験者は、組織キャンプに参加した経験のない 502 名を対象者とした。

2) アンケートの内容：野外活動経験の質問内容は、過去 3 年間から過去 1 年間における経験種目や経験頻度、過去それぞれの時代（幼児期・小学校・中学校・高校・大学他・大学卒業後）における経験種目などである。野外活動・野外教育に対する意識調査も行った。

3) アンケート用紙の配布と回収：配布方法は、経験者は郵送、未経験者は経験者から直接配布をした。回収方法は、未経験者のアンケート用紙の回収と「経験者用」・「未経験用」の二通りのアンケート用紙の返信を経験者にお願ひし、回収を行った。

4) 調査分析：データのコード化終了後、統計プログラム SAS を用いて統計処理を行った。

Ⅲ. 結果および考察

- ・ 野外活動経験の継続性：経験者は、成人してから子どもの頃から継続している野外活動、もしくは何かしらの野外活動を継続して経験する傾向が見られる。しかし、未経験者は、野外活動経験にあまり継続性が見られない。
- ・ 活動種目と野外活動経験：経験者は、サーフィン・ヨットなどの一般的に成人してから行うことが多い新しい野外活動に積極的に参加し、多種多様な野外活動を経験している傾向が見られる。一方で未経験者は、新しい野外活動への参加が少なく、限られた野外活動しか経験していない傾向が見られる。
- ・ 野外活動・野外教育に対する意識：経験者は、子どもにとって野外活動や野外教育は効果的であり、必要だと感じている傾向が見られる。未経験者は、野外活動経験の量により、野外活動や野外教育に対する意識に違いを示す傾向が見られる。

Ⅳ. 今後の研究の進め方

子どもの頃の経験が単純に成人の経験に影響するのか、そこには外的な要因が影響して来ないかなど、今後さらに「経験」に関連する研究を進めていきたい。

参考文献

- ・ Iso-Ahola, S.E. and Jackson, E. and Dunn, E. 「Starting, Ceasing, and Replacing Leisure Activities Over the Life-Span」 (Journal of Leisure Research, 1994, Vol.26, No.3, pp.227-249)
- ・ Kelly, J.R. 「Socialization toward leisure: A developmental approach.」 (Journal of Leisure Research, 1974, Vol.6, pp181-193)
- ・ Kelly, J.R. 「Outdoor recreation prediction: A comparative analysis. (Urbana-Champaign, IL : 1978 University of Illinois, pp1-22)
- ・ McClaskie, S.L. and Napier, T.L. and Christensen, J.E. 「Factors Influencing Outdoor Recreation Participation : A State Study.」 (Journal of Leisure Research, 1986, Vol.18, No.3, pp.190-205)
- ・ Sofranko, A.J. and Nolan, M.F. 「Early life experiences and adult sports participation.」 (Journal of Leisure Research 1972, Vol.4, pp6-18)
- ・ Yoesting, D.R. and Burkhead, D.L. 「Significance of childhood recreation experience on adult leisure behavior: An exploratory analysis.」 (Journal of Leisure Research, 1973, Vol.5, pp25-36)
- ・ 飯田稔・井村仁・影山義光 「母親のキャンプ経験とキャンプに対する態度との関連」 (筑波大学体育科系紀要 6:83-92, 1983)
- ・ 川村協平・東原昌郎・木庭修一 「組織キャンプにおける自己概念の変化に関する研究」 (東京学芸大学紀要 5 部門 31 pp.209-218, 1979)
- ・ 野沢巖 「組織キャンプの自我概念の変化に及ぼす影響」 (レジャー・レクリエーション研究 第5号 1975)
- ・ 野沢巖 「一過性組織キャンプ継続性組織キャンプについての実践的研究」 (レジャー・レクリエーション研究 第6号 1976)